

(続紙 1)

京都大学	博士 (工学)	氏名	張 媛
論文題目	Spatial and Visual Structure of the Historical Landscape in China and Japan: Case Studies of Chinese Buddhist Temples in Sui and Tang Dynasties, and Japanese Gardens (中国と日本の歴史景観の構造: 隋唐時代の中国仏教寺院と日本庭園を対象として)		

(論文内容の要旨)

本論文は、中国と日本の歴史的景観地を研究対象として、地形解析によるランドスケープの空間的・視覚的構造の分析と、景観表象の分析により、歴史景観の特質を明らかにするものである。具体的には、隋唐時代の代表的な中国仏教寺院の景観と、桂離宮、栗林公園の日本の廻遊式庭園を対象として、地形の可視性や透視形態などの視覚構造分析、圍繞性などの空間特性分析を通じて、空間の構成原理を調査・考察した。その結果、仏教的世界観の表現としての自然の山容を眺める中国の巨視的な景観特性と、人為的な庭園構成の中で廻遊行動に伴う自然の奥深さの表現として、池や植林を眺める日本における廻遊式庭園の景観特性が対比的に解明された。本章は6章からなっており、各章の内容および成果は以下の通りである。

第1章は序論であり、本研究の背景と目的、位置づけを示した。

第2章では、本研究が対象とする奈良・平安時代以降の日本の仏教寺院の空間の構成に影響を与えたと考えられている、隋唐時代の中国の34の代表的な仏教寺院のある景観地の選定の方法とその理由を示した。また、研究の方法について、分析に使用する地形の数値標高データ(2015年に公開されたALOS Global Digital Surface Model 30m)や地図(外邦図: 明治初期から1940年代にかけて刊行された旧陸軍参謀本部陸地測量部作成の地図)等の研究資料の説明と分析の方法を明示した。

第3章では、隋唐時代の中国の仏教寺院の敷地選定の傾向を、地形景観の特徴との関連で明らかにした。第一に、隋唐時代の寺院景観の型として、深山型、高山型、都市近接型などの空間類型を見出した。仏教寺院の敷地選定にあたり、選定者の社会階級に依存しつつも、道教や儒教思想に基づき仏教僧や文人らが宗教上の適地として選ばれていた。なかでも、22の対象地の15を占める深山型は、三方を山に囲まれる(仰角5度以上の山が250度~340度の水平視野角をもつ)という共通した特徴をもち、可視領域の範囲は比較的小さいもの(20-30ha)と大きいもの(200-1000ha)に区分されるが、前者には洞山寺、隆昌寺、玄中寺、棲霞寺、国清寺(天台山)などが、後者には菩薩頂と顯通寺(五台山)、少林寺、大法王寺、東林寺などが認められ、いずれも明確で強い地形圍繞が特徴であることを明らかにした。また、高山型は、背後に山を負い(同じく100~180度の水平視野角をもつ)、半ば圍繞されつつ半ば開いた地形景観が認められるものであり、華嚴寺、草堂寺、南臺寺と祝聖寺(衝山)、浄業寺などがある。都市近接型を除き、寺院周囲の山々の山の形状、圍繞感、空間的広がり、対象とした寺院景観に共通する重要な特質であることと、そうした特徴的な圍繞形態をもつ奥まった地形や凹みの地形が選ばれて寺院敷地が造営されていたことを明らかにした。

第4章では、文献資料にみる景観表象の分析を通じて、寺院の空間的および視覚的特徴が敷地の選定に関わり、寺院を造営するのに理想的な場所として認識されていたことや、具体的な地形認

識のあり方を明らかにした。まず、地形景観を象徴的にとらえる見方について、仏教思想に基づく「蓮華」、「須弥山」、「蓬莱山」の象徴という観点で考察し、これらの理想的景観の型や、風水説や桃源郷思想などの背景思想について整理した。

次に、実際の景観地の空間特性との関わりを事例ごとに具体的に明らかにした。「蓮華」象徴型、「風水」型は、3章の地形分析結果でいう深山型に属した。「蓮華」象徴が認められる寺院景観（国清寺、隆昌寺、顕通寺）は、花卉状の山に囲まれた窪んだ地形が特徴的であるが、寺院からは周囲の山の姿を明瞭に認めることを地形分析と絵図分析から明らかにするとともに、文献資料や絵図資料からそれらの山名が確立しているなど、山や地形が明確に認識され、あるいは聖なるものとしての意味づけがあったことを複数の事例で明らかにした。また、「須弥山」象徴の寺院景観として金山寺を取り上げ、その景観および景観表象の特徴を示すとともに須弥山思想との関連を考察した。さらに、「風水」との関連が認められる寺院景観（栖霞寺、萬福寺、天童寺、東林寺など）は、蓮華象徴型に比べてより大きな空間スケールをもつことを示すとともに、風水型は方位や川の流れという景観の特質が明瞭であったことを示した。また、これらの景観地のうちいくつかは、非常に長く閉ざされたアクセス路と、その奥の山に囲まれた空間の広がりをもち桃源郷思想とも密接な関係が見出せるとともに、文献資料にも桃源郷のような聖地として認められていたことを示した。

第5章では、日本庭園を対象に、庭園内の人の手が加わった地形によって作り出された景観の視覚的構造と景観意匠の解明を行った。具体的には、日本における規模の大きい歴史的廻遊式庭園である桂離宮、栗林公園を研究対象として、地形および水際線がつくる空間の「奥深さ」に着目し、その空間構成の技法を考察した。分析手法として、三次元CGを用いて視線方向の水際線（directional outlines）と視線方向に直角の水際線（stratificational outlines）の分布を分析し、水際面の視覚的重なりと奥行の強調、水際線の隠し、の構成を示した。その結果、これらの庭園では、視線方向に狭長な「見通し」を確保することに加えて、視線と直角方向の水際線を多数重ねて視覚的な景観要素の重層性をつくりだし、また水面の先を隠すことによって視覚的な奥深さを創出していることが、いくつかの代表的視点において確認出来た共通の技法であることを明らかにした。なお、本研究成果は景観研究分野の代表的な学術雑誌である Landscape Research 誌に登載が決定している。

第6章は結論であり、以上の成果をまとめている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、中国と日本の歴史的景観地を研究対象として、地形解析による空間的・視覚的構造の分析と、景観表象の分析により、歴史景観の特質を明らかにするものである。具体的には、隋唐時代の中国仏教寺院の景観と、日本庭園を対象として、地形の可視性や透視形態などの視覚構造分析、圍繞性などの空間特性分析を通じて、空間の構成原理を調査・考察している。主な成果は次の通りである。

(1) 隋唐時代の中国仏教寺院の地形景観の特質の解明

奈良・平安時代以降の日本の仏教寺院の空間の構成に影響を与えたと考えられている、隋唐時代の中国の34の代表的な仏教寺院のある景観地を対象として、地形景観の類型化と特徴の考察を行った。中国においては精度の高い地形データを用いた地形解析の前例がなかったが、2015年に公開された地形の数値標高データ(30mメッシュ)を用いて地形解析が可能となった。これにより随唐代仏教寺院の空間の型として、その圍繞形態に応じて深山型、高山型、都市近接型などの空間類型を見出した。また、文献資料にみる景観表象分析を通じて、蓮海、須弥山、蓬萊山という理想的景観の型や、風水や桃源郷思想などの背景思想と、実際の景観地の空間特性との関わりをそれぞれ具体的に明らかにした。

(2) 日本庭園内の地形景観の視覚的構造と景観意匠の解明

日本における規模の大きい歴史的廻遊式庭園である桂離宮、栗林公園を研究対象として、地形および水際線がつくる空間の「奥深さ」に着目し、その空間構成の技法を考察した。分析手法として、三次元CGを用いて視線方向の水際線(directional outlines)と視線方向に直角の水際線(stratificational outlines)の分布を分析した。その結果、これらの庭園では、視線方向に狭長な見通しを確保することに加えて、視線と直角方向の水際線を多数重ねて視覚的な重層性をつくりだし、また水面の先を隠すことによって視覚的な奥深さを創出していることを明らかにした。なお、本研究成果は景観研究分野の代表的な学術雑誌であるLandscape Research誌に搭載された。

上記の通り、本論文は、中国仏教寺院と日本庭園の歴史景観の地形構造と視覚構造の新たな解明を行ったものであって、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士(工学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年2月20日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行って、申請者が博士後期課程学位取得基準を満たしていることを確認し、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。